第15回　日本在宅医学会大会　プログラム別　詳細情報

カテゴリー	市民公開講座
タイトル	次の災害時に現場はどう動けるか？外部はどう支援できるか？～災害医療をめぐるコーディネータについて考える～
日　　時	平成 25 年 3 月 31 日　13：30～15：30
会　　場	真珠の間Ｂ
演　　者	山梨市立牧丘病院　整形外科・古屋聡先生、石巻市河北包括支援センター・川添圭子様、キャンナス・菅原健介様、どさんこ海外保健協力会/シェア・大泉樹様、つなプロ気仙沼・川崎克寛様、石巻開成仮診療所・長純一様
企画趣旨	東北を中心に広大な地域に甚大な被害を与えた東日本大震災では、多くの尊い犠牲と、つらく悲しい経験を経ながら、次代にむけての重要な知見を得ている。それは「コーディネータの重要性」である。混乱する現場の各所に、リーダーは必要であったし、いろいろな形で成立した。外部支援は、その現場に適切に介入するために、そのリーダーとともに現場のマネジメントを行う現地コーディネータを要した。さらに今回の震災は広範囲で、しかも補給のための距離が長かったので、後方支援（ロジスティックス）もとりわけ重要であった。後方を組織し、人や物をたばね適切に配分する後方のコーディネータもまた必要であった。 しかしながら、震災の災禍は現在も進行形であって、そのときどきに得てきた重要な体験の言語化･共有化･一般化はほとんど進んでいないといってよい。問題の解決いかんにかかわらず、時による忘却と、被災者・支援者ともに次の生活へのシフトが、それを難しくしている。 災害危急時にインシデント・コマンド・システムが有効であることは確認できた。しかし、その直後からはじまる、避難所・在宅あるいは施設・病院などの「被災後の生活の場」に、支援者たちはどのように用意し、どのように現場に到着し、どのようにポイントを作って、誰にアクセスし、どのように評価して、どのように振る舞ったか、そして、支援者がそこでどのように生活し、どのように後方支援を受け、どのように交代したか？　膨大な経験を叙述し集約することは困難であるが、今回のシンポは、内（現場）と外（外部支援）をつないだ、あるいはつなぎ続けている人たちをご紹介し、その経験や知見をすこしでもつなぎあわせることを通じて、現在進行形の被災地支援と、考えたくないが必ずやってくる次の災害に備えるための、横のつながりを強める目的で開催したい。